

長澤和俊著

法顯伝 訳注解説 北宋本・南宋本・高麗大藏經

本・石山寺本四種影印とその比較研究

織田 顯 祐

インドに興った仏教が、中国人の血となり肉となるまでには、長い時間と想像もできないほどの困難を必要とした。インドと中国の間には直接越えることのできない山々と延々たる砂漠が広がっている。そのような地理的な困難と文化の違いを越えて仏教が中国人のものとなったのは一つの奇跡であると言っても過言ではない。その奇跡のような出来事は、多くの要素が一つになって成り立ったのであるが、その中でも最も大きな要因として、インド・西域から中国にやってきた渡来三藏と中国からインド・西域へ仏法を求めた入竺求法僧の存在を挙げることができる。すなわち、前者の代表が鳩摩羅什や真諦であり、後者の代表が法顯や玄奘・義浄などである。

三世紀から一〇世紀にかけて、中国からインドをめざした求法僧は意外に多く、一説には千人を超すのではないかと言われている。しかしながら、この中で旅行記を書き残し、現在までそれが伝えられている人となるとその数はきわめて少なく、わずかに六例のみである。この中で時代的に最も早いのが、本書が注釈するところの法顯とその旅行記『法顯伝』（あるいは

『仏国記』である。法顯は通算一五年にわたる大旅行を艱難辛苦の末に成し遂げたが、それをわずか一巻の旅行記にまとめあげた。従って文章がきわめて簡潔であるため、内容を正しく理解することが困難である。本書は、その『法顯伝』の現在望みうる最も理想的な注釈であると言いうことができる。著者の長澤和俊博士は、一貫して中央アジア史・東西交渉史の解明に進んでこられた学会の泰斗であり、多くの著書によって著名である。著者は、以前にも『法顯伝』の訳注を公刊している（『法顯伝・宋雲行紀』東洋文庫一九四、昭和四六年）が、本書はその後になされた現地踏査の成果を盛り込むなど、より完成度の高いものとなっている。本書は、第一部訳注篇、第二部解説篇——『法顯伝』研究、第三部資料篇、の三部によって構成されている。以下、本書の構成に従ってその梗概を紹介しよう。

第一部訳注篇

第一部は、北宋本『法顯伝』（宮内庁書陵部図書寮蔵、一四八八年刊）に対する原文の校勘とその書き下しならびに現代語訳と注釈を内容としている。前述したとおり、『法顯伝』の本文は極めて簡潔な表現となっているため、本文の文字の異同が、解説にあたって特に重要なこととなる。今日では、仏教研究の第一次的な資料としては、『大正新脩大藏經』を用いるのが一般的である。しかしながら、著者の見解によれば『法顯伝』に限ってはそうした方法は適当でないとされる。それは著者が、

わが国に現存する『法顕伝』の諸刊本を検討した結果であり、傾聴すべき意見である。著者の意見は、およそ次ぎのようなものである。現在我々が手にすることのできる『法顕伝』の諸版本は大別して、一、北宋版東禪寺本系、二、南宋版思溪藏本系、三、高麗本系の三系統に整理できる。そして、南宋版は北宋版を校勘した形跡があり、高麗本は校勘者である開泰寺僧統守其がその見識によって改めた箇所が明らかに見られるために、原文の読解にあたっては北宋本を底本とすべきであるというのが全体的な結論である（これらの点は、第二部の第七章に詳述される）。因みに大正藏経は『高麗大藏経』を底本としており、著者の考えによれば、「しばしば経文を随意に改竄し、読みやすくはあるが迂遠、重出の表現に改めた点が少なくない」（一八六頁）とされる。

このような理由で、原文の翻刻にあたっては、北宋版を用いて活字化している。版本と活字の關係上同じ文字がない場合には翻刻の活字に傍点を付して改めたことを記し、版本の明らかでない誤植と考えられるものについては本文中に◇印で訂正した文字を記している。この本文の翻刻にあたっては、本文中に先立つ凡例で、「思溪藏『法顕伝』（南宋本）及び高麗藏本『法顕伝』を参照し、異同を注記した」（IV頁）とあり、本文中に校勘が示されているように記されているが、これらはすべて第三部の『法顕伝』校注』にまとめられており、凡例の通りであると思われる。

全体を五章に分け、第一章 長安からバミール高原へ、第二

章 北天竺の旅、第三章 中天竺の仏跡巡礼、第四章 ガンジス河流域の仏跡巡礼、第五章 帰国の道程、と名づけている。訓読と現代語訳は、以前の『東洋文庫本』に基本的に従っており、大きな変更はない。ただし、『東洋文庫本』は、一般的な読者を対象としているために現代語訳と注釈のみであったものが、本書では原文と書き下し文が併記されており、それによって現代語訳の背景が明瞭となり、学問的な研究に資するものとなっていることは大変喜ばしいことである。また、注釈は大幅に増広されており、この間に為された現地踏査の成果が存分に表現されている。また、新たに写真なども取り入れられてよりわかりやすいものとなっている。著者は既述したように本来、歴史関係の専門家であるが、本書の中には著者の幅広い研究態度が表れており、仏教関係の注釈も充実している。しかしながら、今日の仏教学の水準から見ても多少疑問に思うものがないわけでもない。たとえば、第四章で釈尊の初転法輪にふれて、五比丘について注釈する中で「十力迦葉ダシヤバラ・カーシヤバ Dasabala-Kāśyapa（起氣）」（一〇三頁）を挙げているが、この点は既に「五比丘中に十力迦葉を加ふるは非にして巴利所伝には仏弟子中十力迦葉と呼ぶる人なく、恐らく Kasapa Kasabala（迦葉仏）を翻じて仏弟子と考えたものなるべし」（『印度仏教固有名詞辞典』一四九頁）と言われている。また、弥勒菩薩の授記を「この世に成仏し、釈尊に変わると予言され——」（一〇三頁）と注釈する例などは、何度読んでも意味がよく分からない。そのほかにも、法顕がバターリプトラで手に

入れた「一卷の方等泥洹經」を注釈して大乘の「六卷泥洹經」(『仏説大般泥洹經』大正藏No. 136)とし、しかも「散逸したようである」(一〇七頁)とする例などは注として不適当である。「六卷泥洹經」は、現に大正藏經などに収録されているし、状況から見て、当該の經典は、恐らく小乗の『大般涅槃經』(大正藏No. 1)であると思われることから、著者の誤解であると思われる。しかしながら、これらには無い物ねだりに類することであり、これによって本書の学問的価値が下がると言ったほどのことではない。

第二部解説篇——「法顕伝」研究

第二部は、「解説篇」とされ、第一章 入竺求法僧の活躍、第二章 法顕の生涯、第三章 法顕の西域旅行、第四章 法顕のガンダーラ紀行、第五章 法顕のインド仏跡紀行、第六章 帰国の旅路、第七章 法顕伝の刊本について、の全七章からなる。そして、末尾に法顕の求法の行程を示した地図と求法の行程で通過した国々の一覧表が付されている。第一章では、主な入竺求法僧一覧表として一五人の名前を挙げ、この中の六人(法顕、恵生、玄奘、義浄、慧超、悟空)の旅行記が残っていることを明かす。第二章では、「出三藏記集」「梁高僧伝」等によって法顕の伝記を解説している。法顕の業績は仏教史上画期的なものであったが、その割には生卒年すら明確でない。これは一体どのような事情があったのか、今となっては不明であるが、著者はこれまでの諸説を基本的に踏襲し、法顕の求法求道を「とにかく法顕が西域へ向かったのは、六十の坂を越してか

らであり、帰国は八十歳に手の届こうという高齢であった」(一三八頁)と推定する。諸般の事情を鑑みてこの推定は間違いないものであると思われる。六十歳を過ぎてから、それこそ命を顧みず、未知のインド・西域に求法の旅に出た法顕の求道心の激しさを思わずにはいられない。第三章から第六章までは、第一部の訳注に基づいた本文の解説であり、「法顕伝」の主要な文章を抜き出しながら、本文の次第に従って説明が為される。著者の解説の主眼は、やはり歴史的・地理的な点にあり、ここでは仏教学上の重要な問題にはほとんど触れられない。この点はやむを得ないことであり、我々の今後の課題として残された問題であるが、この点については本稿の最後でふれることにしたい。第七章は、『法顕伝』の名称に関する考察と、現存の諸版本についての書誌学的研究である。『法顕伝』の名称に関しては『仏国記』『仏(歴)遊天竺記伝』などの別名があり、おおむね仏教の分野では『法顕伝』と称され、歴史関係からは『仏国記』(著者は『仏遊天竺記』の簡略化と推定する)』と呼ばれてきたことが示される。後半の『法顕伝』の諸版本の研究は、基本的に足立喜六の労作にもとづきながら、それを一歩進めて諸版本の中で北宋本を所依とすべきことが論理的に明らかにされている。特に大正藏經の底本となった高麗本について、具体的な例証を挙げて却下していく過程は大変興味深いものがある。そのような厳密な検討は、著者の学問的良心から来るものであることは言うまでもないが、より具体的には『法顕伝』の本文があまりにも簡潔であるため、一字の間違いで意味

不明のものとなつてしまふ例が多いからである。この成果は第三部としてまとめられているので具体的な点は後に譲りたい。末尾に伏せられた地図と求法の行程で通過した国々の一覽表も簡単なものであるが、実用性は高い。ただ著者の関心に基づいて制作されたものであるので、仏教学的な関心によつてこの表などを利用する際には、本文からの増補が必要となるであらう。

第三部資料篇

第三部は、わが国に現存する『法顕伝』の諸版本の影印である。収められているのは、一、北宋本（東禪寺本、宋寧三（一〇四）年刊、東寺蔵） 二、南宋本（思溪蔵本、嘉熙三（一一三九）年刊、増上寺蔵） 三、高麗大蔵経本（一二四六年新刊、増上寺蔵） 四、石山寺本（長寛二（一一六四）年写本、天理図書館蔵）の四本と『法顕伝』校注』に使用される宮内庁図書寮本の合計五本である。これらを一頁の上下二段にわけて掲載している。オリジナルの東禪寺本・思溪蔵本は、一紙三〇行又は三六行であり、天地に界線を有し毎行一七字詰めで一面六行の折り本仕立てである。これを六面二十四行分を一段として影印している。これに対し高麗大蔵経本は、一紙二十三行で同じく天地に界線を有し、毎行一四字詰めの卷子本である。その接着部分が中央に来るように二十三行ずつ区切り、それを一段として影印している。これらの影印は、印刷の具合も良好で、本文読解における文字の校勘には大いに資するところである。惜しむらくは、影印にあつて、原本の大きさなどの書誌学的な記述や、解題などが全く付されていないことである。こ

の点は本書を最初から順に読み進めてくれば何ら問題がないとも言えるが、三部構成を取っているのだから、第三部のみを見た場合でも必要最小限の事柄が分かるような配慮が為されてもよいのではないかと思われる。

最後の『法顕伝』校注』は、第一部の訳注の根拠となつた北宋本『法顕伝』の原文の翻刻である。翻刻は、宮内庁図書寮本（北宋版開元寺本、紹興十八（一一四八）年刊）を底本とし、それを二十二行ずつ上段に影印し、活字に翻刻したものを中段に掲げ、思溪蔵本と高麗蔵経本によつて校勘した結果を下段に示している。校勘にあつては地名などには原語も付して研究の便宜を図つてゐる。また活字化の段階で、文字に異動があつたものには傍点を付して厳密を期している。ただ製版上の都合なのか、六行一面のオリジナルが二十二行ずつに切られており、利用上多少不便な観があることは否めない。

以上が、本書の梗概である。本書によつて仏教史上、中央・東アジア史上極めて貴重な『法顕伝』の解説が容易となつた。そこで最後に、本書を通して『法顕伝』を拝読し、改めて評者が気づいたことを述べて紹介を終わりたい。

法顕の求法旅程中、特に仏教が盛んであつたところとして、中央アジアでは于闐国（ホータン）、北インドでは烏菴国（ウジャーナ）、中インドでは巴連弗邑（バータリプトラ）、南インドでは師子国（スリランカ）が特筆されている。そして法顕は、これらの国々は于闐国以外はすべて小乗が盛んであつたとして

いるが、それはどのような違いを言うのであろうか。例えば、法顕が靈鷲山の山頂で釈尊が『首楞嚴經』を説かれたこと思ひ出して感慨に耽って同経を誦したり、パータリプトラの大乗寺で『摩訶僧祇律』を得た、と言っていることから考えると、その大乘・小乗観は、今日我々がいうような概念とは随分違ったものであったに違いない。この点を明らかにすることは、大乘仏教の成立や中国仏教の教判論と関係する重要な課題であると思われる。この点に関して中央アジアから北インドの国々の中で特に大乘仏教が盛んであったとされる所が、ホータンとカルガリク（子合国）のみであり、タシユクルガン（竭叉国）は小乗仏教のみであったとされる。法顕は、天山南路の北道の途中でタクラマカン砂漠をホータン川に沿って横断し、南道のホータンに至っているため、北道の中心地であったクッチャ（亀茲国）やカシユガルを通っていない。また、ほぼ同時代の鳩摩羅什が罽賓で学んだ後、カシユガル（疏勒国）でヤルカンド（莎車国）の王子から大乘仏教を授けられたことが『高僧伝』に記されており、これらを総合的に推察すると、大乘仏教はタリム盆地の周辺で盛んであり、北インドにはいる

と小乗仏教圏となっていた同時の様子が窺われる。

また、法顕が律藏を求めらるにあたって、北インドでも中インドでもスリランカでも、教えが口伝によって伝えられ、文字にして記録したものが無いことに驚いている点が注目される。この点は、真理・真実と言語（特に文字）との関係を通して、中国・日本の仏教における戒律の問題を考える上で特に重要な視点をもっていると思われる。

また中インドの仏跡巡礼に関する記述の中からは、当時、それらが既にさびさびとした状況であったことや、玄奘の時代には相当な規模となっていたナーランダの学問寺が、この時代にはまだ舍利弗の塔があるのみであることなどに驚かされる。このように『法顕伝』から窺知されることは仏教の展開を考える上で非常に重要なことが多い。それ故、本書の刊行によってそのような性格を有する『法顕伝』が正確に解読できるようにしたことは、大きな意義があると言える。

平成八年九月二十日刊 雄山閣 B5版 IV十三・八十索引Ⅷ頁
定価 一一、三六〇円
ISBN 4-639-101379-5